

軻の浦福禪寺藏正徳度朝鮮通信使詩書について―或いは地域の漢文資源活用の一例として―

佐藤 大志

一 はじめに

広島県福山市軻の浦の海辺に佇む福禪寺対潮楼は、江戸時代には朝鮮通信使の客館として用いられた瀬戸内の風光明媚な景勝地である。

本稿でとりあげる「軻の浦福禪寺藏正徳度朝鮮通信使詩書」(以下「福禪寺正徳度詩書」)は、正徳元年(一七一―)、この地を訪れた朝鮮通信使の三使、すなわち正使趙泰徳チョウテオク、副使任守幹イムスガン、従事官李邦彦イバンヤンによる七言律詩三首を書いたものであり、現在も木版に刻まれた複製が対潮楼の堂内に掲示されている。

この「福禪寺正徳度詩書」は、二〇一七年十月に「朝鮮通信使に関する記録」の一つとして、ユネスコ記憶遺産に登録され、それを記念する祝賀行事が二〇一八年三月十日に軻の浦で行われた。稿者は、この祝賀行事の一環として、福山市教育委員会の依頼により、「福禪寺正徳度詩書」の解説を担当した。その際、この詩書が制作された経緯やその内容については、同寺の関係者や地域の方々にもほとんど知られていなかったため、教育委員会の担当者から当日の解説を記録として残すことを求められた。また正徳度朝鮮通信使に関する研究は、その時代的背景や歴史的意義に関する研究や、通信使と日本の文人たちとの交流や贈答・唱和の詩文に関する研究など、多くの先人による研

究の蓄積があるものの、この「福禪寺正徳度詩書」に関する詳しい研究は、管見の及ぶ限りはないようである。

そこで、本稿ではこの「福禪寺正徳度詩書」をめぐって、正徳度通信使と軻の浦との関係について、先行文献の指摘に基づきつつ整理し、彼ら三使が制作した三首の七言律詩が、いつ、どのような状況で制作され、その地の景物はどのように表現されているのか、またそこから彼らのどのような現実や思いを読み取ることが可能なかを考えてみたい。

また「福禪寺正徳度詩書」は郷土の名勝地に伝わる貴重な漢文資源でもあり、地域の歴史や文化を知ることのできる教材として用いることも可能であろう。受験国語としての漢文学習ではなく、地域の歴史や文化について考えるための漢文学習を導く資源としての活用も期して、この詩書の解説と考察を試みたい。

二 正徳度朝鮮通信使と軻の浦

正徳度朝鮮通信使(以下、「正徳度通信使」)は、第六代將軍家宣の襲職の賀使として来聘された江戸時代第八次の使節であり、総勢五百人の使節団は、江戸時代全十二度の使節の中、最大規模のものであった。この時、江戸幕府では、前將軍綱吉時代の政治からの脱却と幕

府財政の立て直しのために、間部詮房と新井白石らによる政治改革が行われようとしており、朝鮮通信使の来聘についても、新井白石の発議により、幕府の財政を節約する一方、内外に將軍の權威を誇示するための聘礼改革が断行された。通信使一行は、前例を無視する幕府の儀礼改変や日本国王号変更の問題に直面し、さらに江戸到着後には朝鮮国王からの国書に対する將軍の返書に、先の朝鮮国王の諱が犯されるという所謂国諱問題があり、使命を終えて漢城に帰着した正使・副使・従事官の三使は到着後に直ちに拘束され、「辱国之罪」によって官職剥奪の上、城外に追放処分となっている。

このような困難な対応を迫られた一方で、彼らは各地で日本の文人たちと交流し、贈答・唱和の詩を多く残していることでも知られる。

李元植氏の調査に拠れば、正徳度朝鮮通信使が日本の儒者文人たちと交わした筆談唱和集は四十近くにのぼり、なかでも通信使の聘礼改革を断行した新井白石と通信使との交流はよく知られるところである。

白石は通信使の来日より前に、対馬の雨森芳洲に自らの詩集『白石詩草』を送り、通信使が対馬に到着するやいなや、その序跋を求めさせ、製述官の李磧と正使の趙泰億が序文を、副使の任守幹、従事官の李邦彦が跋文を寄せている。また使節が江戸に到着すると、白石は数度にわたって通信使の客館を訪れて詩の応酬と筆談を行っており、その時の白石と通信使との筆談を記録したものに『江関筆談』がある。

このように「国体をかけての論争と、最高級の文化の交換」を行った正徳度通信使には、特に卓抜した人物が選ばれていたようである。

正使・趙泰億（一六七五—一七二八）は、字は大年、号は謙齋又は平泉と言ひ、揚州趙氏中興の祖とされる人物である。一六九三年に進士となり、一七一〇年には大司成（正三品）に任じられ、一七二一年に通政大夫曹参議知製教として通信使の正使に選ばれて、日本に派遣

された。帰国後は「辱国之罪」に問われて、一時官職を剥奪されるも、後に左議政（正一品）にまで至り、死後には文忠と諡されている。また副使の任守幹（一六六五—一七二一）は、字は用汝、号は靖菴、又は遯窩と言ひ、一六九〇年に生員試に合格し、一七〇三年に時政を論じて受け入れられず、一時郷里に隠居したが、まもなく司憲持平（正五品）に任命され、一七二一年に通信使の副使に選ばれる。帰国後、正使らとともに官職を剥奪されるが、後に再起して官は承旨（正三品）に至り、当時有望な学者として活躍した人物である。この他にも従事官の李邦彦（号は南岡）、製述官の李磧（号は東郭）、申維翰（号は青泉）、従事官書記の南聖重（号は泛叟）など、いずれも学識のある人物が随伴していた。

この正使趙泰億ら正徳度通信使は、一七二一年五月十五日に首都漢城を出発し、国書を奉じて陸路釜山に至り、七月十五日に対馬へ向かう。対馬からは対馬藩主宗義方に伴われ、海路瀬戸内を通って、九月十六日大阪到着、陸路京都を経て十月十八日に江戸に到着、十一月一日に將軍に謁見し、十一月十九日に江戸を出発、翌年二月二十五日釜山に帰着、三月九日に漢城に帰着している。

鞆の浦には、往路は九月九日夜に寄港し、帰路は年末の十二月三十日の夕方に寄港して、翌元旦に出発している。「福禪寺正徳度詩書」は、江戸での使命を終えて帰路にこの地に寄港したときの作だが、往路では、同じくユネスコ世界記憶遺産に登録された「日東第一形勝」の額字が揮毫されたと伝えられている。

この書の制作経緯については、延享（一七四四—一七四八）、寛延（一七四八—一七五二）の間に、福山藩主の命によって編纂された『鞆浦志』に次のような記述が見える。

正徳元年辛卯年秋九月、朝鮮人來聘の時、李邦彦南岡と号する人、當寺の風景を美歎して、日東第一形勝といふ六字を書、此額今に有。蓋、李邦彦、字美伯、朝鮮完山人、官通訓大夫行弘文館校理知製教兼經筵侍読春秋館紀注。正徳辛卯來聘の時、為「從事」。

この記事では、正徳元年秋九月に従事官の李邦彦がこの寺の風景の美しさに感歎して、この六字を揮毫したと伝えるのみで、その詳しい経緯については記されていない。

この記事からおよそ六十年後、菅茶山（名は晋師。茶山はその号）が福山藩主阿部正精の命によつて、文化六年（一八〇九）に編纂した『福山志料』では、先の『輞浦志』の記事を引いた後に、当時の事を伝え聞いた人の話として、次のような逸話を紹介している。

今按二日東第一ノ額ヲカキシ時ノ事ヲツタヘ聞タル人アリ。正使ヨリ記室等数人ヲノ庭上ニ榻ヲ移シ、互ニ指点評品シテ坐賞スルコト程久シク、後ニ彼六字ヲ書タリ。ソノ意ヲ通事モテ問シメシニ、ココヲ無双ノ風景トハ既ニ朝鮮ニテ聞ツタエタルコト久シ。然レトモ外ニ匹敵アラシヤト、関東ノ往来ニ眼ヲツケシニ真ニココニ勝レル処ヲミス。十六目ノミル処、相違ナシト、ヲノヲノ議定シテ、カク書タル也、ト云シヨシ。十六目トハ八人ヲ云也。然ルヲ通事心ツカス、十六目ハイカカト問カヘシタレハ、韓人大ニワラヒシト、通事カタリシヨシナリ。

編者が伝え聞いた話によれば、「日東第一形勝」という評は、李邦彦一人によるものではなく、正使ほか八名が、この地の景物を品評し賞嘆しあつた後に、この六文字を揮毫したこととなっている。またそ

の意図を尋ねた通訳によれば、この地の風景は他にない無双のものであることは、彼らが朝鮮に居る時に既に伝え聞いていた。しかし他にこの地に匹敵するものは本当にないのだろうか、と、関東に往来する間に注意して見ていたが、実際にこの地より優れた場所はなく、十六の目（八人）の見立てがみな同じであつたので議論定まつて、このように書したと通信使が言つたこととなっている。先に李邦彦一人の嘆賞であつたことが、ここでは使節八名の総意となつており、『輞浦志』の伝承に比べて、この地を「日東第一形勝」とした通信使の評がより高められている。⁷

では、一方の通信使の記録では、往路の輞の浦訪問はどのように記されているのだろうか。正徳度通信使の使行録は、正使・趙泰億の『東槎録』、副使・任守幹、從事官・李邦彦の『東槎日記』、押物通事・金頭門の『東槎録』の三種があり、それぞれに次のような特徴がある。⁸ 趙泰億の『東槎録』は、通常の使行録が使行中の記事を日付ごとに記録するのは異なり、使行中に制作した自作の詩を時系列に配列した紀行詩集ともいふべきものであり、彼の個人詩文集である『謙齋集』中に収録されている。

また任守幹、李邦彦の『東槎日記』は、五月十二日の漢城出発から十月十五日の大坂到着前までは任守幹の記録が残っているものの、それ以降は「日記補 從事所録刪節（從事 録する所の刪節）」とあつて、從事官・李邦彦の使行録から抜粋された記事が採録されており、帰国後に欠落部分を補完したものと考えられる。その内容は儀礼改定をめぐる両国の対立や使臣団の対応姿勢、国書改書の過程が詳しく記されており、使節の使命を果たそうとする三使の責任が反映したものとされる。⁹

金頭門の『東槎録』は、訳官としての活動や使行の実務行政に関す

る内容が記録され、また寄港地の景物や土地の習俗などにも目が向けられており、三種の使行録の中で最も詳細に使行中の出来事や当時の日本が記されている。

では、まず金頭門『東槎録』の記述から見てみたい。次の引用は、往路九月九日の鞆の浦訪問の部分であり、引用より前には、九月九日の朝に蒲刈から出帆した一行が、高島、忠海、三原、横島、田島を経て、夜となつて月明かりのもと、海潮山磐台寺（阿伏兔観音）を望み見つつ船を進めてきたことが記されている。

二更量、到鞆浦之口。候缸可数百余隻、缸缸灯燭、羅列如火城、真壯觀也。館即海岸山福禪寺、距船滄可二馬場許。皆設行歩席。左右人家、櫛比皆極鮮麗、家家植灯、戸戸懸箔。女人觀光者、皆不露面。而市塵帘肆、皆揭門標、一見可知為某肆也。館宇在於水中絕壁之上、俯压滄海、層岩絶壁、列若錦屏、海山之絶勝、歴路之第一。（二更の量、鞆浦の口に到る。候缸数百余隻ばかり、缸缸の灯燭、羅列すること火城の如く、真に壯觀なり。館は即ち海岸山福禪寺、船滄を距つること二馬場許りなるべし。皆歩席を設行す。左右人家、櫛のごとく比びて皆極めて鮮麗、家家灯を植て、戸戸箔を懸く。女人の光を觀る者、皆面を露はにせず。而して市塵帘肆、皆門標を掲げ、一見して某の肆たるを知るべし。館宇水中絶壁の上になりて、滄海を俯压し、層岩絶壁、列なること錦屏の若く、海山の絶勝、歴路の第一なり。）

二更（午後十時）頃によく鞆の浦に到着した一行を、数百もの出迎えの船が灯火を掲げて待っていた。それはまるで松明を掲げた宮城の朝会儀礼（「火城」）のような壯觀であつたと言う。そして港か

ら宿泊の館所となつた海岸山の福禪寺までの町の様子や習俗を記した後、記事は福禪寺の事に及び、海岸の絶壁の上に立つ館は、海を威圧するように佇み、高く屹立する岸壁は錦の屏風を連ねたような偉容であつたと記されている。そして末尾には「海山之絶勝、歴路之第一」という評があり、これは李邦彦が揮毫したとされる「日東第一形勝」の評と類する。

また任守幹の『東槎日記』は、同日の出来事を次のように記す。

二更末到鞆浦。閭舍甚盛、塵肆亦多。館所即海岸福禪寺、臨海砌台、眼界曠豁、形勝最佳云。而余則身疲夜深、宿于船上。正使從事屢使人邀之、不能粧束入去矣。島主伴候、送魚酒索麵等物。是日行二百里。（二更の末、鞆浦に到る。閭舍甚だ盛にして、塵肆も亦た多し。館所は即ち海岸福禪寺、海に臨む砌台、眼界曠豁にして、形勝最も佳なりと云ふ。而るに余、則ち身疲れ夜深くして、船上に宿す。正使・從事屢人をして之を邀へしむるも、粧束して入り去くこと能はず。島主伴して候し、魚酒索麵等の物を送らしむ。是の日二百里を行く。）

任守幹の記録は、金頭門のように港周辺の町や人々の様子、そして習俗などは記さず、簡潔に町の様子を記した後、宿泊所の福禪寺のことに及ぶ。その描写は簡潔だが、「形勝最佳云」と伝聞の形で、やはりこの地の形勝が最も素晴らしいということを記している。

松田甲氏によれば、鞆の浦が通信使の記録に登場するのは、室町時代のころ、足利義教・義勝継承の慶弔として派遣された通信使の書状官であつた申叔舟の『海東諸国記』（一四七一）に「友津」の記述があることを嚆矢とし、江戸時代に至つて、第二次通信使（元和三年・

一六四二)の従事官であった李景稷の『扶桑録』に「韜海に到り、則ち最も明秀奇絶」とあり、さらに第五次通信使(明暦元年・一六五五)の従事官であった南龍翼の『扶桑録』に「若し海路の形勝を論ぜば、則ち当に以て第一と為すべく、而して洞庭と雄を争うべきなり」と、韜の浦を通信使が通る海路の第一の形勝と認め、中国の洞庭湖と雄を争うと高く評価する記述が見える。¹¹⁾ 任守幹、金頭門の使行録の往路九月の記事中に、この地の形勝を第一とする発言も、また「日東第一形勝」の額字が揮毫された理由も、このような前任の通信使の評価に基づくものと考えられる。

なお、この日、副使の任守幹は韜の浦到着が夜遅くとなり、また疲労のため、正使や従事官の再三の誘いにも関わらず、福禅寺には行かず、船上で一夜を過ごしているが、福禅寺に宿泊した正使たちはどのような夜を過ごしたのだろうか。幸いに、趙泰億がこの夜、韜の浦に泊した時に制作したと考えられる詩が、彼の『東槎録』に三首収録されており、往路での韜の浦を、彼がどのように表現しているかを知ることが出来る。

「夜泊韜浦」 趙泰億

風静滄溟月色高 風静かにして 滄溟 月色高く
舵楼吟嘯十分豪 舵楼 吟嘯 十分豪なり
篙師報道韜津近 篙師 報道す 韜津近しと
万点灯花列百艘 万点の灯花 百艘に列なる

「海岸山福禅寺」 趙泰億

陡岸諸天迴 陡岸 諸天 迴かにして
危楼特地高 危楼 特地に高し

仙槎蓬島路 仙槎 蓬島の路
佳節菊花醪 佳節 菊花の醪
星月涵秋影 星月 秋の影を涵し
魚龍静夜涛 魚龍 夜の涛に静かなり
平生湖海氣 平生 湖海の気
到此十分豪 此に到りて 十分豪なり

「次東韻」 趙泰億

峰頂危楼逼絳霄 峰頂の危楼 絳霄に逼り
客間秋思正迢迢 客間の秋思 正に迢迢たり
仙区日月三山近 仙区の日月 三山に近く
海国風烟万里遥 海国の風烟 万里遥かなり
且挹杯觴酬令節 且く杯觴を挹りて 令節に酬ひ
独憑軒檻度深宵 独り軒檻に憑りて 深宵を度らん
扶桑咫尺尋真路 扶桑の咫尺 真を尋ぬるの路
鶴背群仙取次招 鶴背の群仙 取次に招く

まず「夜泊韜浦(夜 韜浦に泊す)」は夜に韜の浦に到着したときの情景を詩にした七言絶句であり、初二句は月に照らされる静かな海、船上の楼閣から聞こえてくる吟唱の声を写す。「豪」は声音が明らかに響きわたること。後二句では、熟練の船人がまもなく韜浦だということで目を向けると、百の船が連ねられた皆さんの灯火が見えたと言う。これは、先の金頭門『東槎録』に記されていた出迎への船の灯火のことであり、ここはその灯火の壮麗さともに、盛大な出迎えを喜ぶ思いを読みとることができるであろう。

次の「海岸山福禅寺」は、題名に示されるように宿泊の館所となつ

ていた福禪寺を詠んだ五言律詩。首聯は海岸山とその上の福禪寺対潮楼の高さを言い、頷聯は蓬萊山に見立てられる日本への使行、その行路の重陽の節に、この地で菊花の酒を酌み交わすこととなったことを言う。頸聯は星や月の光が海にその光を落としてきらめき、海の生き物も夜の波の下に静かに潜む、静かで穏やかな夜の海の眺望を詠む。尾聯の「湖海気」は豪快な気風という意味もあるが、ここでは隠遁を志す気風のことを言い、常日頃抱いていた隠遁を志す思いが、仙界の如きこの地に至って盛んにわき起こると言うのであろう。

最後の「次東韻（東の韻に次す）」は、雨森芳洲（漢名は雨森東）の詩に次韻した七言律詩。次韻詩とは、別人の詩に用いられている脚韻字と同類の韻を用いて作る和韻詩の一種、ここでは芳洲の詩に用いられていた「霄」「迢」「遙」「宵」「招」の脚韻字を、趙泰億も用いて詩を制作したということ。まず首聯は対潮楼が空にせまるほどの高さであり、異郷を旅する秋の寂しさも高まっていくことを言う。頷聯は蓬萊の三山は仙界に近く、海に囲まれたこの地は遙か遠くまでもやがたなびくさまを詠む。この地が仙界に近い場所であることを言うと同時に、それは故郷から遠く離れた土地であることを言うのであろう。頸聯は酒杯を掲げて重陽の佳節に応じ、ひとり欄干にもたれて夜を過ぎ、高まる異郷での哀愁を強いて忘れようとする。そして尾聯では扶桑すなわち日本の地は狭小ではあるが、真を尋ねて仙界へと至る道であり、鶴の背に乗った仙人たちがつぎつぎと招いてくれるのだと、この地の素晴らしさを讃えて結ばれている。

この三首に於いて、福禪寺対潮楼は、その高さが強調され、また静かな夜の海の眺望が述べられ、蓬萊三山の伝説を踏まえた仙境としてのイメージが強化されているのみで、その姿やそこからの眺望にはまだ十分に目が向けられていないようである。九月九日の往路の訪問は

到着が夜遅く、翌朝も巳の刻（午前十時）には出帆の準備が始まっており、十分な滞在時間がなかったこともあったのかもしれないが、「日東第一形勝」と評した当地の景物を、このとき趙泰億はまだ積極的に詩に表現しようとはしていないようである。

そして、江戸での將軍進見の勤めを終えた帰路、正徳元年の年末に再び軻の浦に宿泊したときに制作されたのが、「福禪寺正徳度詩書」である。

三 「福禪寺正徳度詩書」制作の経緯について

正徳度通信使一行が江戸からの帰路に再び軻の浦に寄港した時の様子、金頭門『東槎録』は次のように記す。

三十日甲申、陰平明。島主請行、遂発舟。申時到韜海福禪寺。海雲初発、夕陽明鮮、東南群山、霽雪増色、一抹人烟、遙起於遠浦、孤峰之上林、円福寺暮鍾、又動真画中境界也。眼前風景与重陽登臨時無異。但夜黒無月、此為可欠。〈中略―引用者〉集僧伴候。三使送伴問島主、仍謝集僧。寺僧願得一詩。三使各題贈之。昏後一行入謁於三使、相前仰慰客中饑歲。（十二月）三十日甲申、陰平明。島主 行くを請ひて、遂に舟を発す。申の時 韜海福禪寺に到る。海雲初めて発き、夕陽明鮮にして、東南の群山、霽雪色を増し、一抹の人烟、遙かに遠浦に起り、孤峰の上林、円福寺の暮鍾、又真画の中の境界を動かせり。眼前の風景 重陽登臨の時と異なる無し。但だ夜黒くして月無きは、此に欠くべしと為す。〈中略―引用者〉集僧伴して候す。三使伴を送りて島主に問はしめ、仍りて集僧に謝す。寺僧 一詩を得るを願ふ。三使

各題して之に贈る。昏後一行入りて三使に謁し、相前みて客中の餞歳を仰ぎ慰む。おのおの

通信使一行は、十二月三十日の申の時（午後四時頃）に輛の浦の福禪寺に到着した。雲が晴れて海に沈む夕日、東南の山上には美しく照らしだされる雪、遙か遠くの浦に立ちのぼる炊煙、そして対潮楼の対面の小高い山の林中に佇む円福寺の鐘は、真の画のような彼の地の境地を揺り動かすようだという。「眼前の風景 重陽登臨の時と異なる無し」とは、往路九月九日重陽の節の訪問を言う。中略部分には、備中の守安部正邦から献呈の品々を贈られたこと、また祝いの餅や酒、雉・猪・鹿の肉などを人々が次々と献上にされたこと、さらに鏡餅や正月飾りなどの年末年始の習俗について記す。そして、客館に集まった僧侶たちの使者に対して、三使が対馬島主を介して返礼を送った後、寺僧が三使に詩を所望してきたので、三使がそれぞれ詩を記して贈ったとある。この寺僧の願いに応じて、三使が記した詩が「福禪寺正徳度詩書」と考えられる。

その三使の詩の本文と詩後に添え書きされた跋文を示すと、次のようである。¹³

正使・趙泰億

縹繚鼈頭最上台 八窓簾箔倚天開 煙生極浦斜暉斂 雪罷遙山霽色来
海内幾人能此会 天涯遠客得重廻 秋風不尽登高興 又醉新年柏葉杯
辛卯除夕、平泉題于福禪寺。曾於重陽過此、故歸句及之。

副使・任守幹

天涯歲尽客登台 大海遙山極望開 征棹曾從秋月過 帰帆今逐夕陽来

空洲石出潮初落 絶域春生雁欲回 頼有諸公同此会 不妨終夜罄深杯
辛卯除夕、東韓靖庵題

從事官・李邦彦

海畔岩峽百尺台 寺門高傍白雲開 寒潮極浦煙光淡 返照遙山雪色来
落帽曾成佳節飲 帰帆猶趁旧年回 天涯此日真堪惜 強举樽前柏酒杯
辛卯歲除日。東槎帰客、次唐律韻、題于福禪寺。曾於重九日過此、故篇中及之。

三使の詩を見て、まず気づかされるのはこの三詩は同じ脚韻字（「台」「開」「来」「回（廻）」「杯」）を用いた次韻詩であるということである。先に述べたように、次韻詩とは、別人の詩に用いられている脚韻字と同類の韻を用いて作る和韻詩の一種であり、また和韻詩の中でも原作と同じ脚韻字を用いる次韻詩は最も厳しい制約を受ける。この次韻詩は中唐の白居易と親友の元稹との間に始まり、それ以後親友同士の応和詩の一つの型となったものである。三使は福禪寺の求めに応じて詩を作るのに、敢えて互いの脚韻字を同じものとする次韻の方法を用いて詩を作り合ったようである。

また従事官の李邦彦詩の後に添え書きされた跋文に「東槎の帰客、唐律の韻に次して、福禪寺に題す」とあり、更に趙泰億『東槎録』に取められる同詩の題名にも「韜浦福禪寺除夕用唐律韻（韜浦福禪寺の除夕 唐律の韻を用ふ）」（傍点稿者、以下同じ）とあることから、彼ら「東槎の帰客」は「唐律韻」に次韻して詩を制作したようである。

趙泰億『東槎録』には、他にも彼が使行中に同行の通信使たちと交わした次韻詩や聯句が多く収められており、また日本の文人との唱和にも次韻詩は多い。この福禪寺での次韻詩も、これらの次韻詩や聯句と

同じように、知的遊戯の作として作られたようである。

では、ここで趙泰億らが次韻の原作として用いた「唐律韻」とは、誰のどのような詩であったのだろうか。「唐律韻」とは「唐代の律詩の韻」を指すと考えられ、『全唐詩』の中から彼らと同じ脚韻字を用いる律詩を探し求めると、同韻字の詩は次の一首のみであった。

「九日登望仙台呈劉明府容」 初唐・崔曙

漢文皇帝有高台 漢文皇帝 高台有り

此日登臨曙色開 此の日 登臨すれば 曙色開けり

三晋雲山皆北向 三晋の雲山 皆北に向かひ

二陵風雨自東來 二陵の風雨 東より來たる

関門令尹誰能識 関門の令尹 誰か能く識らん

河上仙翁去不回 河上の仙翁 去りて回らず

且欲近尋彭沢宰 且く近ごろ彭沢の宰を尋ね

陶然共醉菊花杯 陶然として 共に菊花の杯に酔はんと欲す

この詩は南宋・周弼が編纂した唐詩の選集『三体詩』に採録される詩であり、恐らくこれが三使が次韻した原詩であろう。¹⁴ 詩の内容は、九月九日の重陽の節に漢の文帝が築いた望仙台に登って、いままさに明けゆく暁の空の色を眺め、趙・韓・魏三晋の雲と山々が北に連なり、東は肴山の二峰から風や雨が近づいてくるさまを一望できる高台からの雄大な眺望を描いた後、関守の尹喜や河上の仙老のような仙人は今や望むこともできず、しばし隠者の陶淵明のような県令の劉容とともに養生の効果がある菊花の酒でも飲みたいものだと言いかけたものである。

重陽の節の登台を詠んだ詩であり、時節は合わないものの、高台に

登臨してそこからの眺望を詠み、そこでの思いを述べるといふ構造は、三使の詩と共通している。また前述の如く、彼らは往路には重陽の節にこの地を訪れており、重陽の節を詠む崔曙の詩が原詩に選ばれたのは、そのような事情も関係しているのかもしれない。

では、この原詩に次韻しながら、三使は自分たちの現在、すなわち異国の地日本に使用し、大晦日の輓の浦の福禪寺対潮楼に滞在する自分たちの現在をどのように表現しているのか。次節では三使の詩の内容を解説しつつ、その背後にうかがえる問題について考えてゆきたい。¹⁵

四 「福禪寺蔵正徳度詩書」の内容について

まず正使・趙泰億の詩の書き下し文と現代日本語訳を示すと以下の通りである。¹⁶

「韜浦福禪寺除夕用唐律韻」 趙泰億

縹緲鼇頭最上台 縹緲たり 鼇頭 最上の台

八窓簾箔倚天開 八窓の簾箔 天に倚りて開く

煙生極浦斜暉斂 煙は極浦に生じて 斜暉斂まり

雪罷遙山霽色來 雪は遙山に罷みて 霽色來たる

海内幾人能此會 海内 幾人か 此の会を能くす

天涯遠客得重廻 天涯 遠客 重ねて廻るを得たり

秋風不尽登高興 秋風 尽くさず 登高の興

又醉新年柏葉杯 又酔ふ 新年柏葉の杯

辛卯除夕、平泉題于福禪寺。 辛卯除夕、平泉 福禪寺

【現代日本語訳】
曾て重陽に此に過する。
故に結句之に及ぶ。()

遙か遠くに見える 大ウミガメの頭上に聳える仙山の 最も高き台閣
八方に開かれた窓に懸かる御簾は 天空に巻き上げられて開くようだ
夕暮れに炊煙が遠くの浦に立ちのぼって夕日はかげり

雪は遙かなる山の上に降りやんで空は晴れわたる

このような会合にあずかれるものが天下にどれだけいるだろうか

遠い異郷を行く旅人が再びめぐり合うことができるとは

まさに秋風吹くころには登高の楽しみを尽くせなかったが

もう一度ここで新年を祝って柏葉酒の杯を重ねて酔いしれよう

首聯は海岸の高台に高くそびえる対潮楼の姿を描く。「鼈頭」とは、
勃海の東の大海に浮かぶ五山を背負う伝説の大亀を指す。『列子』湯
問に拠れば、勃海の東の大海に五つの山が浮かんでおり、その五山を
安定させるために十五匹の大亀が頭にその山を乗せ、三交代で六万年
毎に一交代して、山が動かぬようにしているという。その亀の頭の上
の山、すなわち日本の中で、最も高い台閣である対潮楼は、その御簾
が天に巻き上げられるかのように言い、まず対潮楼の高さを強調する。
続いて頷聯では、その対潮楼からの眺望を述べる。ここは、先に引い
た金頭門『東槎録』の記事と重なり、夕暮れに遠くの浦に立ちのぼる
炊煙と遙かな山の上の雪と晴れた空を描き出す。そして頸聯では、異
郷を旅する身でありながら、この地を再度訪れることができた幸福を
述べ、尾聯では往路では重陽の登高の楽しみを尽くしきれなかったの
で、元日に長寿を祝して飲む柏葉の酒を共に飲もうと問いかけて結ば
れている。

前半は、高台に登臨してそこからの眺望を眺め、そこでの思いを述
べるといふ原詩の構造を踏まえつつも、日本にまつわる古代の伝説を
踏まえて高台の姿を表現し、眼前の景物に即して高台からの眺望を描

き出そうとしている。そして、後半は再訪の喜びを述べた後に、原詩
の重陽の菊花酒を、新年を祝う柏葉酒に置き換えて、往路の重陽の楽
しみに加えて、更に新年の楽しみを尽くそうと結んでいる。原詩の脚
韻字をただ用いるだけではなく、原詩の主題と構造を踏まえつつ、現
在の情景や心が表現されており、また往路訪問時の三首の詩に比べて、
眼前の景物に即して、そこからの眺望を描き出そうとしていることが
うかがえる。

では、副使の任守幹の詩はどうであろうか。

同・任守幹

天涯歳尽客登台 天涯 歳尽きて 客台に登る

大海遙山極望開 大海 遙山 望を極めて開く

征棹曾従秋月過 征棹 曾て秋月に従ひて過ぎ

帰帆今逐夕陽来 帰帆 今夕陽を逐ひて来たる

空洲石出潮初落 空洲 石出でて 潮初めて落ち

絶域春生雁欲回 絶域 春生じて 雁回らんと欲す

頼有諸公同此会 頼ひに諸公の此の会を同にする有り

不妨終夜罄深杯 妨げず 終夜 深杯を罄くすを

辛卯除夕、東韓靖庵題（辛卯除夕、東韓靖庵題す）

【現代日本語訳】

遙か遠い異郷で年の瀬を迎える日 高殿に上れば

大きな海と遠くの山が 見渡す限り広がっている

往路には秋の月かげに従うように立ち寄ったが

帰路には西へ西へと夕陽を追うようにふたたびここにやって来た

人けのないみぎわに岩が露わになり 潮は引きはじめ

遙か彼方のこの地も春となり 雁が帰るように我々も故地に帰ろうと

している

うれしくも皆とこの会合を共にすることができたからには
一晚中心ゆくまで飲みつくしたいものだ

首聯は遠い異郷で旅客となり高台に登ってそこからの雄大な眺望を
言う。趙泰億が対潮楼の高さを誇張するのに対して、「天涯」「客」
とあつて、ここでは自らが異郷の旅人であることが示されている。頷
聯では往路に秋の月夜に訪れ、帰路には夕暮れに到来したと言ひ、往
来の事実在即してこのたびの再訪について述べる。そして、頸聯にお
いて潮が引いて岩場の岩が現れるようになり、この僻遠の地にも春が
訪れて雁も帰る時期となつたことを言う。ここにも「絶域」という語
が見え、この場所が故郷から遠く離れた僻遠の地であることが意識さ
れ、また雁が帰ろうとする姿にいま故郷に帰ろうとする自分を重ね合
わせているようである。

このように任守幹の詩は、原詩からやや離れて、故郷から遠く離れ
た辺境の地で客として新年を迎えなければならぬ寂寥感を感じさせ
る。尾聯では、この会合を共にできる喜びを心ゆくまで尽くしたいと
言うけれども、この詩は、趙泰億のように、ここ対潮楼の眺望に対す
る賞賛やこの地を訪れた喜びは強調されず、むしろ僻遠の地で年を越
さなければならぬ寂しさと帰郷の思いが含まれる。

先に引いた金顛門『東槎録』には、三使が寺僧の求めに応じて詩を
作った後に、「昏後一行入りて三使に謁し、相前みて客中の餞歳を仰
ぎ慰む。」と記していた。「仰慰」とは目上の者の心を慰めることを
言ひ、日暮れ後に通信使一行は三使に拝謁して、旅の途中で旧歳を送
ることに對して、三使に慰みを申し上げていたと言ふ。この記述から
も、新年を異郷の地で迎えなければならぬ悲哀は、任守幹個人のもの

のではなく、三使をはじめとする通信使一行が共有する思いであつた
ようである。それは、この日に作られたと考えられる趙泰億の次の七
言絶句にもうかがえる。

「次高達夫除夜韻」 趙泰億
禅楼終夜耿無眠 禅楼 終夜 耿として眠る無く
却算帰程更惘然 却かへつて帰程を算かぞへて更に惘然たり
日下長安何処是 日下の長安 何れの処か是れならん
天涯遠家經年 天涯 家に遠くして 年を経たり

この詩は題名にあるように、盛唐・高達（字は達夫）の「除夜作」
に次韻したものであり、結句は六字しか残されておらず、一文字欠落
しているようだが、脚韻字の「眠」「然」「年」は、高達の韻に次韻
する。

「除夜作」 高達
旅館寒灯独不眠 旅館の寒灯 独り眠らず
客心何事転悽然 客心 何事ぞ 転うつたた悽然たる
故郷今夜思千里 故郷 今夜 千里を思ふ
霜鬢明朝又一年 霜鬢 明朝 又一年

高達「除夜作」は、高等学校の国語教科書にも収録される詩であり、
大晦日の夜に旅先で一人眠れぬ夜を過ごす寂寥を述べ、自分は故郷の
人々を、或いは故郷の人々が自分を、今夜思い慕うも、白髪の我が身
は、明日元旦にはまたひとつ、異郷の地で年を重ねなければならぬ

ことを嘆いた詩である。

この高適の詩に次韻する趙泰億もまた、禪楼すなわち対潮楼にて眠れぬ夜を過ごし、帰りの旅程を救えて更に憂いを深める思いを前半二句にまず詠む。第三句の「日下長安」は皇帝を「日」にたとえ、皇帝の居住する長安、彼ら通信使にとっては朝鮮国王の居住する首都の漢城を指し、遙か遠くの首都を望み見ても何処にあるのかも分からず、天の果てに家を遠く離れて年を重ねることを嘆いている。この異境の地で首都漢城を思う嘆きは、翌日の元旦に作られた「壬辰元朝」でも詠まれている。

「壬辰元朝」 趙泰億

新年猶作未婦人 新年 猶ほ未だ帰らざるの人と作り

昨夜槎頭望北辰 昨夜 槎頭 北辰を望む

遙想九門清漏曉 遙かに想ふ 九門清漏の曉

百官簪珮賀王春 百官の簪珮 王春を賀すを

前半二句は新年を迎えて未だ帰ることができず、昨夜大晦日は船の上で、北辰すなわち首都漢城を思い望んでいたと言い、後半二句は、今朝は遙か漢城の王宮では早朝に百官が参列して、新年の賀を祝しているであろうことを想像し、そこに参列できない自分の身を嘆いている。

このように、遠く首都漢城を離れ、異郷（「天涯」）で旧年を送り、新年を迎えなければならない悲哀は、三使をはじめとする通信使一行が共有する思いであったようである。そしてまた、趙泰億の詩に首都漢城や国王と百官が集う宮城が強く意識されることは、このとき彼らが置かれた状況とも関係するかもしれない。

先にも述べたように、朝鮮国王からの国書に対する將軍の返書中に中宗国王の諱「懌」が犯されていることに気づいた通信使は、幕府に激しく抗議して改書を求めた。すると、幕府側も朝鮮からの国書中に三代將軍家光の諱「光」が犯されているとして、返書の改書を拒否してきた。交渉の末、通信使は家宣の返書を一旦返し、朝鮮国王の国書も持ち帰って改写したのち、改めて対馬で改書を交換するということが落ち着いたものの、通信使は持参した国書を持ち帰り、將軍からの返書も持参しないという異例の状態で帰国することとなった。

その後、改書を求めていた將軍の返書は、十二月二十一日に通信使のもとに届き、問題の箇所は「忻權」の二字に訂正されていると、対馬藩奉行から通信使に伝えられた。趙泰億はそのことを朝鮮国王に報告したが、後にこの修正箇所は誤りで、国王の諱は「戢」に改められていたものの、趙泰億は慌てて国王に訂正の報告をするという失態を犯してしまう。十二月三十日の輛の浦訪問は、この失態が明らかになった前後のことだったようである。

三宅英利氏は任守幹・李邦彦『東槎日記』に新年元旦の記事がまったく記されていないところから、三使がこの「国書請改」で混乱と不安の極地にあったと推測する。¹⁷三宅氏の推測が妥当なものであるかどうかについては確証は得られていないが、福禅寺対潮楼での饑歳を心から喜ぶことができない任守幹や趙泰億の詩の一つの背景として、このような問題が存在したことも考慮されるべきだろう。

では、三使のもう一人である従事官の李邦彦の詩はどうであろうか。

同・李邦彦

海畔岩嶼百尺台

海畔 岩嶼たり 百尺台

寺門高傍白雲開

寺門 高く白雲に傍ひて開く

寒潮極浦煙光淡 寒潮 極浦 煙光淡く
返照遥山雪色来 返照 遥山 雪色来たる

落帽曾成佳節飲 落帽 曾て成す 佳節の飲

帰帆猶趁旧年回 帰帆 猶ほ趁おふ 旧年の回

天涯此日真堪惜 天涯 此の日 真に惜しむに堪へたり

強拳樽前柏酒杯 強ひて拳ぐ 樽前 柏酒の杯

辛卯歲除日。東槎帰客、次唐律韻、題于福禪寺。曾於重九日過此、故篇中及之。(辛卯歲除の日。東槎の帰客、唐律の韻に次して、福禪寺に題す。曾て重九の日に此を過る、故に篇中之に及ぶ。)

【現代日本語訳】

海辺に高くそそり立つ百尺の台閣

福禪寺の門はあたかも白雲のそばで開いているようだ

冷たい潮の打ち寄せる遠い浜辺は、うつつらともやにつつまれ

夕陽が遠くの山はだの白雪を照らしている

以前、風に帽子を吹き飛ばされた孟嘉のように重陽の宴を楽しんだが

帰路にまたその続きを追うことができたとは幸いだ

はるか異郷で迎えるこの日は、まことに哀惜すべきものだ

いまは気持ちを引き立てて、樽前で柏葉酒の杯をあげようではないか

従事官・李邦彦の詩は、正使・趙泰億の詩の構造に似て、首聯ではまず福禪寺対潮楼が座す高台の高さを表現する。ただ正使が古代の伝説を踏まえてその高さと仙界のイメージを重ね合わせたのと比べるとやや控えめに、天空に聳える高台を表現している。頷聯もまた、遠くの浦の煙と遙かな山の頂に積もる雪を描いており、これも正使の詩に類する。頸聯は重陽の節に東晋の桓温が龍山で宴を催した時、孟嘉が風に吹かれて帽子が落ちたことに気付かず、それを孫盛が文を作って

嘲ったところ、孟嘉は即座に見事な文章でそれに応じたという故事を踏まえ、かつて往路でもこの地で存分に楽しんだが、帰路に再びその楽しみを尽くせることを喜ぶ思いを詠む。この聯もやはり正使の頷聯を踏まえるものの、孟嘉の故事は、桓温||趙泰億(上官) — 孟嘉||李邦彦(下僚) という関係を考えると、その関係に即した故事が選択されていると言える。

そして尾聯では、まず頷聯までの流れを承けて、「天涯」でのこの日が哀惜するに足る素晴らしい時であると言った後、結びの句では「強拳」とあるように、新年を祝う柏葉の酒杯を挙げて楽しむことをためらわうかのような動作が詠み込まれている。この動作は任守幹の詩に見えた「天涯」で旧年を送り、新年を迎えねばならない悲哀に起因するものではなからうか。そうであれば、李邦彦の詩は、全体としては原詩を踏まえる趙泰億と同じように、この地の景物を讃えて再訪を喜ぶ思いを強調しつつ、結びにおいて、異郷で新年を迎える使節一行の思いも詠み込んだと理解できるであろう。

五 むすび

以上、本稿では鞆の浦福禪寺藏の正徳度朝鮮通信使の三首の詩について、その制作の背景と経緯を辿りつつ、その内容の解説を試みてきた。三使の詩は、重陽節に高台に登臨して作られた初唐の崔曙の七言律詩に次韻した詩であり、正使は原詩の内容と構造を踏まえつつ、眼前の鞆の浦の景物とそこで新年を迎える思いをつづり、副使はやや原詩の内容から離れて、異郷で新年を迎える使節団が共有する悲哀を詠み込み、従事官は正使と同じように、眼前の景物と再訪の喜びをつづると同時に、結びには異郷で新年を迎える悲哀を含ませている。このよう

に三使の詩は原詩との関係だけでは、三使の詩それぞれが、他者の詩をどのように受けとめ、眼前の景物とどのように向き合い、そしてその時の思いを表現しようとしているのかを考えることで、その詩作の過程やことばの向こう側にある世界をより豊かに想像することが可能となる。

そして、この正徳度通信使の詩作以後に、この地を訪れた通信使たちが福禪寺対潮楼の形勝を詠んだ漢詩も多く伝わっており、また通信使たちの漢詩に触発された日本の文人がこの地の形勝を詠んだ漢詩もまた数多く残されている。¹⁸それらは、江戸時代に編纂された『鞆浦志』（既出）『備陽六郡志』（宮原直御編 一七四〇頃成立）『西備名区』（馬屋原重帯編 一八〇四頃成立）『福山志料』（既出）などに収録されており、各回の通信使、また時空を異にする日本の文人たちが、それぞれ古人の詩作をどのように受けとめ、また福禪寺対潮楼の形勝とどのように向き合い、そしてそれをどのように表現しようとしたのかを読みとることができる。¹⁹

その中の一首に江戸時代後期の文人菅茶山の「対潮楼」²⁰という詩があり、その題下注には「楼在備後鞆浦。朝鮮使李邦彦等、往来宿此、賞嘆不已、遂議製扁額題曰、日東第一形勝。（楼は備後鞆浦に在り。朝鮮使李邦彦等、往来して此に宿り、賞嘆すること已まず、遂に議して扁額を製りて題して曰はく、日東第一形勝と。）」²⁰とあり、この詩が正徳度通信使の「日東第一形勝」の評を踏まえることが注記されている。

「対潮楼」 菅茶山

評品江山人不同 江山を評品するは人同じからず

傍観遠客眼応公 傍観の遠客眼 応に公なるべし

望看朱棟懸天半	望み看れば	朱棟	天の半ばに懸かり
来見蒼岩挿水中	来り見れば	蒼岩	水の中に挿う
島嶼断連松石影	島嶼	断連す	松石の影
雲涛豁達帆樯風	雲涛	豁達たり	帆樯の風
休言邦俗誇郷土	言ふを休めよ	邦俗	郷土を誇ると
果爾靈区甲大東	果して爾り	靈区	大東に甲たり

まず首聯は、山川の評価は人によって異なるものの、外からの旅人の観察眼は公平であろうと言ひ、この地の形勝がかつて通信使に高く評価されたことを前置きする。そして、頷聯では海岸山福禪寺の姿を、頸聯ではそこからの眺望を描いた後、尾聯では「我が国の風俗は郷土の山川を自ら誇るものだと言ひはやおやめなさい、やはり思つた通り、この秀麗なる地域は極東第一の形勝なのだよ」と通信使の評を踏まえ、この地の形勝を改めて評価、賞賛している。

先に述べたように『鞆浦志』と『福山志料』の伝承を比べれば、「日東第一形勝」という通信使の評価は、語り伝えられる間に高められ、強化されてゆく傾向がうかがえた。²¹この詩もその傾向の延長線上に位置づけられるものであろう。しかし、この詩はただ外国使節の評価をもとに、おらがお国自慢を正当化しようとするだけの詩でも無い。頷聯の対潮楼の高さとその海岸山の威容を描くことは彼の三使の詩にも見え、この地を描く典型的な発想にとも言えるが、頸聯はやや異なる。途絶えては連なる島々に、その緑の木々とごつごつとした岩山の姿、雲のように広がりゆく白い波に、行き交う船の白き帆に吹きつける風。この頸聯のような景は三使の詩にも、また後の通信使の漢詩にも見当たらない。

この頸聯のような風景描写が、では何に由来するものなのか、その

ことを考えることが次なる課題となるが、その点についてはまだ考察が及んでおらず、後考を俟ちたい。

注

1 ユネスコ世界記憶遺産に登録された「朝鮮通信使に関する記録」のうち、「福禪寺対潮楼朝鮮通信使関係資料」は次の六件である。

「日東第一形勝」額字一枚・「対潮楼」額字一枚・朝鮮通信使正使趙泰億詩書一幅・朝鮮通信使副使任守幹詩書一幅・朝鮮通信使從事官李邦彦詩書一幅・韓客詞花一卷

2 本稿では正徳度通信使に関して、主として次の文献を参照した。

松田甲『日鮮史話 第三篇』（朝鮮総督府 一九二七）・同『統日鮮史話 第二編』（朝鮮総督府 一九三一）

多田正知「正徳辛卯朝鮮通信使と日本の漢文学」『斯文』一八一—二一九三—六）

宮崎道生『新井白石序論』（芸林会 一九五四）

三宅英利『近世日朝関係史の研究』（文献出版 一九八六）

辛基秀・仲尾宏編『大系朝鮮通信使 善隣と友好の記録』第四卷（明石書店 一九九三）

『季刊日本思想史』四九号「特集朝鮮通信使」（ベリかん社 一九九六）

李元植『朝鮮通信使の研究』（思文閣出版 一九九七）

鄭英実「辛卯・正徳の朝鮮通信使使行録とその性格」『千里山文学論集』八四号（二〇一〇）

3 李元植「正徳度の筆談唱和と遺墨関係資料」（辛・仲尾編前掲書所収）。

4 三宅前掲書第二篇第三章「新井白石の制度改革と通信使」四二七頁。

5 松田甲「正徳朝鮮通信使と加賀の学者」『統日鮮史話 第二編』所収）参照。

また正使と副使の経歴については、鄭前掲論文も参照。

6 松田甲「日本に名を留めたる李東郭」（『統日鮮史話 第二編』所収）に拠れば、製述官は三使につぐ重要な職とされ、日本の学者文人と詩文の応酬や經書の質疑も担当するため、学識豊かな人物が任命されていた。正徳度の製述官・李東郭も日本の文人と唱和・筆談を数多く行っており、本国においてはその後、ほとんど名を知られることはなかったが、日本では当時広く知られた人物であり、日本の先行研究も多い。

7 「関東の往来」の「関東」が近江以東、江戸に至る旅程を指すのであれば、額字の揮毫は帰路のこととなるが、これもまた通信使の評価を高めるための記述と理解すべきかもしれない。

8 正徳度通信使の使行録とそれぞれの特徴については、鄭前掲論文を参照。なお趙泰億の『東槎録』は、辛・仲尾前掲書所収の韓国奎章閣文庫・ソウル

大学校附属図書館所蔵『謙齋集』をテキストとし、任守幹ら『東槎日記』は同書所収のソウル大学校附属図書館所蔵本を、金頭門『東槎録』は同書所収の京都大学図書館所蔵本をテキストとして用いた。

9 鄭前掲論文二三七—二四〇頁参照。なお任守幹ら『東槎日記』の翻訳に、若林実『東槎日記 江戸時代第八次（正徳元年）朝鮮通信使の記録』（日朝協会 愛知県連合会 一九九三）がある。

10 「輶」は国字であるため、通信使の記録では「輶」の字を用いる。

11 松田甲「韓使の日東第一形勝と題せる備後輶津の福禪寺」（『日鮮史話 第三篇』所収）参照。

12 任守幹『東槎日記』九月十日の条に「巳初、島主請行。（巳の初め、島主行くを請ふ。）とある。

13 三使の詩の本文と跋文は、『朝鮮通信使が見た輶の浦—世界記憶遺産登録をめざして—』（福山市輶の浦歴史民俗資料館 二〇一七）所収の福禪寺蔵正徳度詩書の影印を用い、更に趙泰億の詩については『謙齋集』所収の『東

榎録」と校合した。

14 趙泰億『東槎録』には他に「次唐律韻」と題する詩があり、その原詩と考えられる中唐・皇甫冉「送李録事赴饒州」も『三体詩』に採録される。また趙泰億が使行中に次韻している唐代の詩人は、この他に杜甫（九日次老杜五律二首七律三首）、白居易（牛窓夜泊聽金頌謙彈琴次香山開筍韻）、高適（次高達夫除夜韻）がある。

15 三使の詩の制作順序は、明確な記述がないために明らかにはしがたい。趙泰億『東槎録』所収の彼の詩題を閲するに、趙泰億が他の人の詩に次韻する場合は、それが詩題に示されている。例えば、先掲の雨森芳洲の詩に次韻した「東の韻に次す」もその一例である。ただし「福禪寺藏正徳度詩書」の跋文を見ると、李邦彦の跋文が最も詳しく詩作の経緯を記しており、両者の先後は決めがたい。そこで本稿では制作の先後についてはひとまず措き、三首の詩がどのような関係にあるかを考察する。

16 三使の詩の現代日本語訳作成に当たっては、福山理子氏の解説資料（前掲『朝鮮通信使が見た鞆の浦―世界記憶遺産登録をめざして―』所収）を参照。

17 三宅前掲書四二〇頁。任守幹・李邦彦『東槎日記』は十二月二十一日から翌年一月十六日までの記事を欠く。前述のごとく、任守幹・李邦彦『東槎日記』の後半は李邦彦の使行録からの抜粋であり、また十一月十一日からは「国書請改始末」と題して、国書改正の問題を中心に記事を採録している。

年末年始の記事がないのは、この期間に国書に関する問題が特になかったため、記事が採録されなかっただけの可能性もある。

18 例えば、『西備名区』『福山志料』が対潮楼を詠む日本漢詩の冒頭に掲げる西成斎（西依成斎、肥後の人。一七〇一―一七九七）「題対潮楼」に「知是嘗登韓使者、日東煙景此台多（知る是れ嘗て登る韓使者の、日東の煙景此の台に多しを）」とある。また『沼隈郡志』（先台会 一九二三）芸文誌には、嘉永六年（一八五三）に対潮楼で参会者百有余人が正徳度通信使の韻

を用いて詩を賦したとする松江天瑞の序文と漢詩二首を収める。

19 『鞆浦志』『備陽六郡志』『西備名区』はいずれも特能正通編『備後叢書』全十二卷（備後郷土史会 一九二八―一九三五）所収の校訂本を参照。

20 『西備名区』巻二三所収。なお菅茶山詩のテキストには『黄葉夕陽村舎詩』前編巻四所収の本文を用いた。

21 菅茶山には他にも「鞆浦石塘記」（『黄葉夕陽村舎文』巻二所収）に「是地、島嶼繁回、松石秀潤、其勝見于詩歌、古今無數。三韓流鬼貢使、来往例宿于此、輒恋賞不已。某年韓使某等八人、品評議定、為日東第一形勝、其從事官某隸書揭于楣間。由是觀之、此地之著、不独以安輿、又不独於海内也。夫勝地清境多在辺陬僻壤。劇邑要地率乏佳眺美景。（是の地、島嶼繁回し、松石秀潤にして、其の勝の詩歌に見ゆること、古今 数ふる無し。三韓流鬼の貢使、来往の例に此に宿し、輒ち恋賞すること已まず。某年韓使の某等八人、品評議定して、日東第一形勝と為し、其の從事官某 隸書して楣間に掲ぐ。是に由りて之を觀れば、此の地の著るるは独り安輿を以てのみならず、又独り海内に於けるのみならずなり。夫れ勝地清境 多く辺陬僻壤に在り。劇邑要地 率ね佳眺美景に乏し。）」とあり、「日東第一形勝」の故事を根拠としつつ、鞆の浦の形勝が特筆すべきものであることは国内外に広く認められるものであったことと記している。

（広島大学）